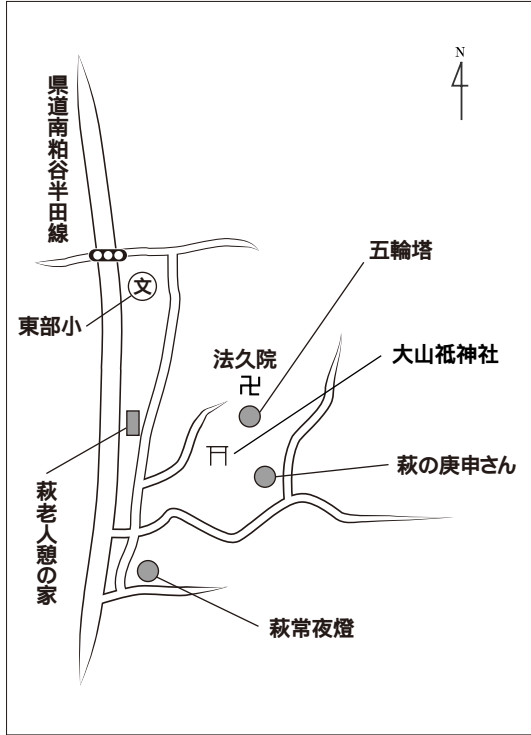


# シリーズ 阿久比を歩く ⑨7



五輪塔の中央に「三つ葉葵の紋」

「萩常夜燈」へ行く。県道南粕谷半田線沿いのガソリンスタンド近くの一角に建つ。  
萩地区の寄付者により、大正五年一月に造られた。土台の部分に石が積み上げられ、見上げるほど立ちの高い灯籠。  
伊勢神宮への献灯目的で建造された常夜燈は、伊勢の国、現在の三重県を望む方向に「伊勢大神宮」と刻まれた文字が向けられている。灯り



は昭和十五年ころまで毎晩ともされていたようだ。  
常夜燈のいわれを知る人がいないか探すために、細道を北へ向かう。地蔵がまつられるお堂の前で、楽しそうに会話をする二人の女性に出会う。年齢を聞くと七十九歳と七十三歳。  
「まだ私たち若いで、まっとう取った人に聞くと、ええかもよ」。嫁いで、五十年以上経つけど、詳しいことは知らんねえ。みんな待ち合わせ場所にしとるけどね。  
笑うと目尻にしわが寄る、とてもチャーミングな二人に話が聞けた。常夜燈の存在自体は薄らいでいるが目印としての役割を果たしているようだ。  
次に「萩の庚申さん」に向かった。通称「萩のスカイライン」と呼ばれるカーブの多い、坂道を上り切った場所左手に二つのお堂が並ぶ。西を向いて、右に「庚申像」、左に「役行者像」が安置される。一年に一度、地元の人たちで供養されているとの



右のお堂に「庚申さん」が安置されている

こと。高台から村人を見守り続ける「庚申さん」に手を合わせる。  
最後に法久院を巡った。三つ葉葵の紋が石に刻まれた「五輪塔」がある。キノコのような形をした黒石の間に白い丸石を重ね、巨大な塔と なっている。三つ葉葵が二方所確認できる。  
住職の話によれば、尾張藩の菩提寺の建中寺(名古屋)から譲り受けたもので、黒石は尾張家の直系だけが使用する「伊豆石」とのこと。  
「この紋所が目に入らぬか」。水戸黄門の印籠と同じ葵の御紋ですね。頭が高い、控えおろつて。君は助さんや格さんというよりか、うっかかり八兵衛だろ。「そう言われると自分も思いましたよ」。  
次回につづく。